

<出題の意図>

令和六年度 一般選抜 小論文 出題の意図

問題文の出典：治部れんげ、『「男女格差後進国」の衝撃—無意識のジェンダー・バイアスを克服する』、小学館新書、2020年10月6日、引用範囲 pp. 73-78. (設問の都合上、一部改変・省略したところがある。)

限られた時間の中で、出題された長文を読み解きながら自ら思考し、それを論理的に表現できているかを問うものである。

問1

- 1) 設問の趣旨を的確に捉えているか。
- 2) 具体例と関連させて説得力をもって論じているか。
- 3) 課題の在所を把握し、適切に絞り込んでいるか。

問2

- 1) 具体例と関連させて説得力をもって論じているか。
- 2) 文章を整然とまとめ上げているか。

※ この「出題の意図」についての質問及び照会には、一切回答しません。

令和六年度 山形県立米沢女子短期大学

一般選抜 小論文 問題用紙

【問題】次の文章を読んで、後の設問一、設問二に答えなさい。

九年ほど前、私が赤ん坊を連れて郵便局の窓口へ行った時のことです。円高ドル安だったので、ドルを購入しようとしたところ、窓口の女性から馬鹿にしたような態度を取られて驚きました。ちょうど育休中で赤ん坊を連れていたので「この人は自分の収入がない人」と思われたのかもしれませんが。

ところが、私名義の通帳を見せて話を始めると、同じ人物と思えないほど態度が変わりました。私は会社員でしたから、毎月一定額の収入があり、それが自分の口座に振り込まれていたのです。その数字を見た後、窓口の女性の対応が丁寧になり、他の金融商品を勧めてきたのです。つまり、ジェンダー・バイアスは男性だけの問題ではないのです。

メガバンクの支店も含め、お金を扱う金融機関の窓口でこの種の何を何度か経験し、働く女性の中には「稼ぐのは男性、女性」は家庭を守っており、大きな金額は夫に相談しないと決められない」という思い込みを持つ人が少なくないと感じています。

多くの人が「無意識のジェンダー・バイアス」を持っています。一方的に他人を批判するのはフェアではありませんから、ここで、私自身の失敗体験を書いておきましょう。

「女性の記者さん」として取材先から驚かれたのとほぼ同時期、今から二十年ほど前の出来事です。都内のＩＴベンチャー企業を取材に行きました。当時、普及率が高まっていた携帯電話向けのコンテンツ提供サービスで急成長していた企業です。会議室に通され、取材相手である社長と同席する広報室長を待っていると、扉が開いてふたり、スーツ姿の人が入ってきました。ひとりは男性、もうひとりは女性です。

私は何も考えず、先に男性に名刺を渡して挨拶しようと思いました。男性が社長で、女性が広報担当だと思い込んでしまったからです。すると男性が「あ、こちらです」と一緒にいた女性に先に名刺交換するように促しました。社長は女性だったのです。失礼しました！と謝ると、社長は「いいですよ」と気にしていない様子でしたが、今でも思い出しては恥ずかしい気持ちになります。私自身は「女性記者は珍しい」と言われると違和感を覚えるのに、男性と女性が同じ場にいたら、男性の職位が上だと決めつけてしまう思い込みを、自分自身が持っていたわけです。

もうひとつの例は比較的最近、家庭の中で起きました。ある時、小学生の息子から「この本、面白いからママも読んで」と勧められました。全3巻のスパイ小説で、十代の男の子が主人公、正体不明の悪役が登場します。「巻目を読み終えたところで、私は息子に言いました。

「『うう、ものすごく強くて悪い、正体不明の人って、主人公のお父さんだったりするんだよね』
すると息子は『どうしてお父さんなの？どうして悪役は男って決めつけるの？』と言ったのです。」

このように、子どもに指摘されて自分のジェンダー・バイアスに気づくことは、よくあります。例えば身近に見かけるポスターや広告のジェンダー・バイアスに息子はとても敏感で「どうして犯罪者のイメージを男性で描くんだろうね」と批判しています。例えば、家の近くにある大通りに置かれた交通ルールの注意書き。この通りは自転車道と歩道が分かれており、自転車は歩道を走ってはいけないことになっていますが、しばしばルール違反をする人がいます。

毎日この道を通っている私が観察する限り、一番多いのは中高年女性のルール違反ですが、市役所が設置した「自転車は歩道を走りましょう」という注意書きには、若い男性が自転車に乗って若い女性にぶつかっているイラストが描かれています。悪いことをするのは男性という決めつけを見るたびに不快な気持ちになります。

日頃、こんなことを考えていても、ふとした拍子にバイアスが出てしまう。他人を批判するだけでなく、自分にもバイアスがあることを意識しておかなくては、と思うのです。

これまで例を挙げたように、ジェンダーに基づく「決めつけ」は、女性だけでなく男性に対しても起きています。ある県の職員向けに「無意識のジェンダー・バイアス」に関する研修をした時のことです。男だから」とか「女だから」という決めつけを耳にしたことはありませんか？と訪ねて、周囲の人と意見交換をしたら、男だから」とか「女だから」という決めつけを見聞きしたことはあります。地域の女性団体が使用する施設の担当を任せていました。その時は、女性団体の方々に「男の子」と言われることがよくありました」

「ちょっとピンとこない、という人のために、男女を逆にしてみました。中高年の男性グループに対する行政サービスを提供す

る、若い女性職員がいたとします。その女性に対してグループの男性が「あの女の子」と言ったとしたら、どうでしょうか。おそらく、今なら注意されるはずですが、それは、相手を馬鹿にしている感じがしますよ」と。女の子ではなく、姓で××さんと呼ぶべきですよ」と。

女性に対して失礼なことは、男性に対してもやってはいけません。日頃、女性の権利拡大を求めて活動している女性でも、自らの持つジェンダー・バイアスに無自覚なことがあるわけです。女性だから」男女平等に関する活動をしているから」大丈夫と慢心せず、他者を個人として尊重しているかどうか、自分に問うことが必要でしょう。

出典 治部れんげ著 『男女格差後進国』の衝撃―無意識のジェンダー・バイアスを克服する』二〇二〇年、小学館新書。設問の都合上、一部改変・省略したところがある。

設問一 ジェンダー・バイアス』とは何か、あなたが生活の中で見聞きした事例をもとに二〇〇字〜二〇〇字で説明しなさい。

設問二 無意識のジェンダー・バイアス』を是正するために、あなたの身近でできることは何かあるだろうか。あなたの意見を七〇〇字〜八〇〇字で自由に述べなさい。